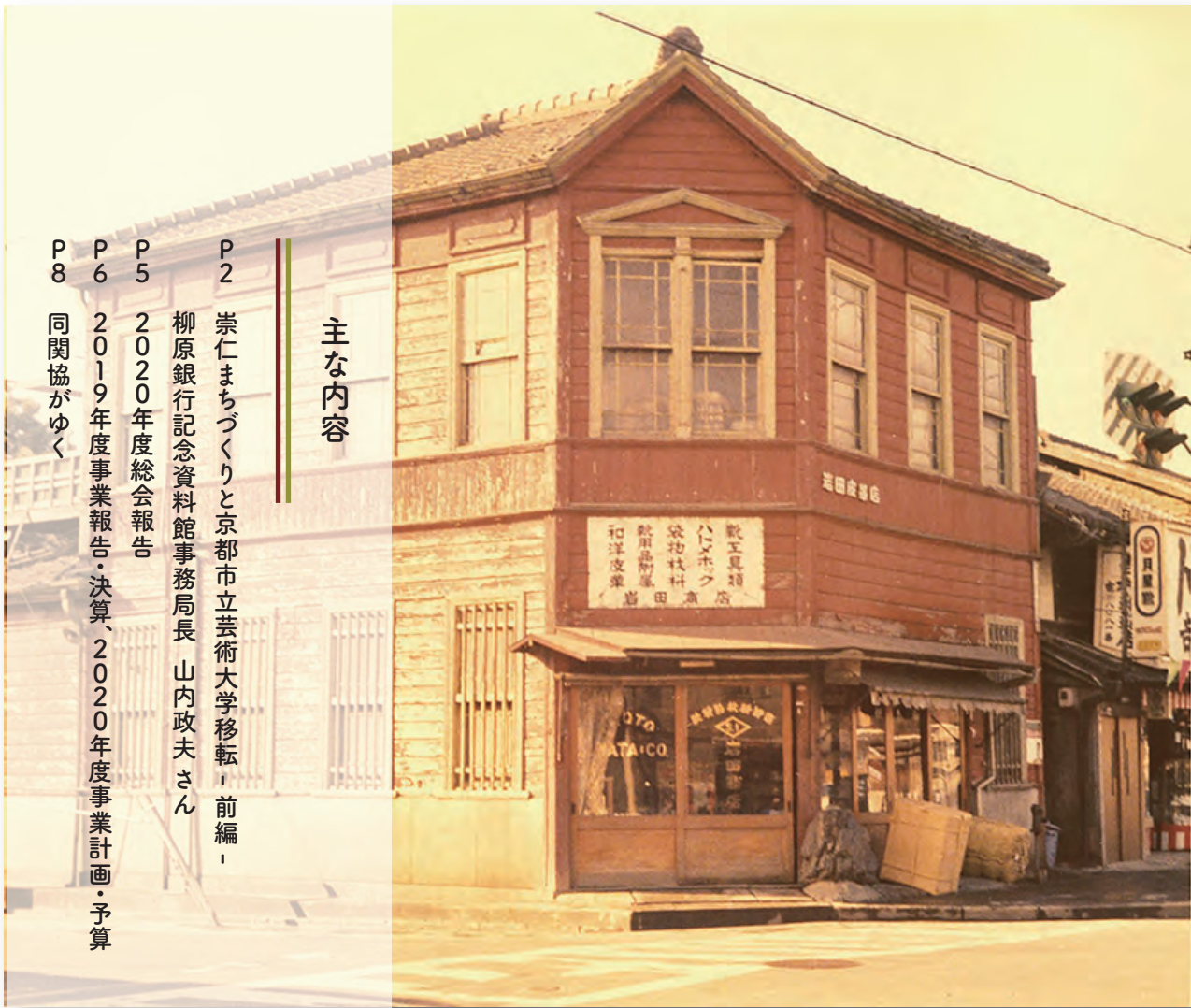


真宗大谷派同和関係寺院協議会

2020年12月31日発行

どうかんきょう

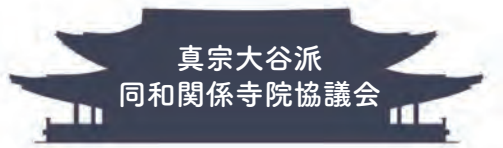
# 同関協だより 第61号



## 主な内容

- P2 崇仁まちづくりと京都市立芸術大学移転：前編
- P5 柳原銀行記念資料館事務局長 山内政夫さん
- P5 2020年度総会報告
- P6 2019年度事業報告・決算、2020年度事業計画・予算
- P8 同関協がゆく

移築前の柳原銀行本社屋



真宗大谷派  
同和関係寺院協議会

私たちは 教団内外における部落差別の克服を願いとし  
差別に苦しむものが一人でもいる限り その差別からの解放を自らの課題とする  
「同関協」規程前文

## ご意見・ご感想募集

『同関協だより』編集委員会では、より良い紙面づくりのため、皆様のご意見・ご感想を募集しています。

QRコードをスマートフォン、もしくはパソコンで読み取っていただければ、ご意見・ご感想の受付サイトへ行くことができます。

受付期間は次号発行日までです。

QRコードが読めない方は、次のアドレスを直接ご入力ください。



<https://forms.gle/fC1WeHkPBSPkREMf8>

## 編集後記

編集委員になって約一年、先日『同関協だより』を読んだとはじめて電話をいただき嬉しかったことがあった。『同関協だより』は、会員から数名の編集委員が集まり、編集会議を行っている。掲載記事や担当を決め、原稿ができれば校正作業と読み合わせを数回の会議を通して行い、ようやく完成するのである。今年は新型コロナウイルスの感染予防対策として会議の延期や中止、異例のZoomを使ったオンライン会議もあった。今回はじめて「編集後記」を書くことになり、なにか読んでいただけものが書けたらと考えていた。しかし、いざ原稿を書き出すと最後まで書けないのである。一般の社会情勢から新型コロナウイルスの件や、アメリカ大統領選挙の件、人種（黒人）差別の件等、書けそうなきことはいくつもありそうだが、書き始めると詰まってしまう。原稿の提出ができず、「書けずに悩んでいる」とメールを送った編集委員には、「悩み続けて・・・」と、アドバイス？も。どの内容で書き始めても詰まってしまうのは、文章の最終部分、起承転結で言えば結の部分のようだ。自分が納得する結にならない。では、自分が納得する結とは何だろうか。振り返り考えると、「まだまだ十分に知らない知識や内容を無理矢理文章に詰め込み、見栄え良く上手にまとめ、読んでくださる方から高評価を得たい」と考えている自分の姿が見えた。素直に書けない自分がそこに見えた。編集会議の雰囲気は私にはとても居心地よく、会議での内容や休憩時の雑談は、毎回私にとって新たな刺激・知識とすることができている。今回の「編集後記」でも、自身を改めて問い直すことができた。編集委員を引き受ける前、「みんな学びながら編集委員をしているんですよ」と言っていて背中を押してくださった方に、感謝である。

伊藤 慈成

## \* お詫びと訂正

第60号の中で誤りがありました。訂正し、お詫び申し上げます。

6頁 中段12行目 × 農民十五名 → ○ 農民十四名

## 同関協だより第61号

発行日 2020年12月31日 発行人 松尾英城

発行 真宗大谷派同和関係寺院協議会 真宗大谷派解放運動推進本部内「同関協」事務局  
〒600-8164 京都市下京区上柳町199 ☎075・371・9247

## 会費納入のお願い

(年会費5,000円)

[ □ 座番号 ] (ゆうちょ) 01010-6-2770

ドウワカンケイジンキョウギカイ

[ □ 座名 ] 同和関係寺院協議会

# 崇仁まちづくりと京都市立芸術大学移転

- 前編 -

柳原銀行記念資料館 事務局長 山内 政夫 さん

柳原銀行記念資料館 <http://suujin.org/yanagihara/>

まちづくり推進委員会の連名で、門川京都市長に「創造的な人材が集まる核となる施設の早期導入による『創造・交流・賑わいのまち』の実現について」なる要望書を提出した。さらに、東西本願寺の「寺内町」だった地域や崇仁地区の人々も含む「下京区内二十三学区自治連合会」が、同年十二月十七日に「京都市立芸術大学の下京区への移転に関する要望書」を提出し、崇仁地区からの動きとも連携して、京都市立芸術大学の崇仁移転は確定的なものとなった。つまり、崇仁地区側から要望した「創造的な人材が集まる核となる施設の早期導入」が、京都駅東部エリアの方向性を決めたのである。

日本で最も古い芸術大学が、差別や貧困に苦しんだ歴史を持つ地域へ移転するのである。京都駅の北、西、南側は商業ベースのビルやホテルが立ち並ぶが、崇仁地区を含む東側には、学術や芸術、教育ベースのまちを官民一体となって進めていくことになった。京都の歴史や文化や芸術などとともに、人権や自然環境のメッカともなるような展開をし、それを

はじめに

JR京都駅から北へ向かうと東本願寺の伽藍が見える。毎年秋に営まれる報恩講の時期になると、参詣する門徒らで賑わう。京都市民にとって風物詩である。東本願寺の周辺には、多くの仏具などの商店や簡易旅館が並んでいる。江戸時代に東本願寺の自治的な支配がなされていた「寺内町」であった時、商家や宿屋が軒を連ねていたことが引き継がれているためである。

その「寺内町」付近を少し南東へ行くと、鴨川七条に着く。そこには差別や偏見にさらされながらも、「真宗信仰」にあつい人々が集住した崇仁地区がある。現在の崇仁地区は、もともと六条河原にあったものが、江戸時代半ばに現在の場所に集団移転した。明治時代から大正時代にかけて町名を変更し、一九一八（大正七）年に京都市に編入された。のちに「平安京」の時代のこの街区の呼称である「崇仁坊」にちなんで、「崇仁」と呼ばれるようになった。

## 1 まちづくりのはじまり

崇仁地区は、JR京都駅の東に位置し、地区内を高瀬川、東には鴨川が流れる。現在は一見すると自然豊かで風光明媚な土地である。しかし、つい最近まで劣悪な住宅環境にあり、いまだ結婚や就職における差別、それに伴う教育の問題などがある。そのため、住民自身の熱心で粘り強い運動やまちづくりが取り組まれた。さらに先駆的な京都市の「同和行政」の展開もあり、市営住宅の建設・建て替え、高齢者施設や教育拠点の建設、人権啓発の事業、河原町通りの道路拡幅、高瀬川の付け替え、国道を通すなど、大幅に「実態差別の改善」がなされた。

しかし、その一方で、少子・高齢化が進み、事業は大きな節目を迎えていた。そこで、差別を乗り越えるために活動してきた立場から、あらためてまちづくりを通じて尽くす事によって差別の壁を乗り越えようと、二〇一三（平成二十五）年、崇仁自治連合会と崇仁

化活動を行っていきたいと願ってきた。

## 2 「崇仁地区の文化遺産を守る会」の取り組み

崇仁地区では少子・高齢化の波にともない、京都市の事業にも協力しながら、家や土地が移転・売却されてきた。その結果、地域の歴史のかつ文化的な財産を失い、自分たちのルーツの痕跡がなくなることにつながる危険性がある。そのため、被差別部落の歴史や文化

世界に向けて情報発信するとの意欲が示された。それは差別や貧困を跳ね返す努力を積み重ねてきた結果であり、単に自分たちだけが良くなればよいということではなく、共にありたいという願いが、まちづくりの方向性を決定づけたといえる。

決して乱暴な資本でなく、京都の玄関口にふさわしいまちづくりを通して、京都の文化や歴史のみならず、水平運動にみられるような「人間に光あれ」との思いを込めて、共に文



『柳原銀行とその時代』  
発行：崇仁地区の文化遺産を守る会  
(1991年)

2020年度

# 総会報告

書面審議

2020年8月5日付

真宗大谷派同和関係寺院協議会 2020年度総会

- 議案 -

- 議案第 1 号 2019年度事業報告
- 議案第 2 号 2019年度決算書並びに監査報告
- 議案第 3 号 2020年度事業計画(案)
- 議案第 4 号 2020年度予算(案)

二〇二〇年度の総会は、新型コロナウイルス感染症の感染が拡大している状況をふまえ、その開催の在り方について三役と常任委員による協議が行われ、集会形式での開催を取り止め、書面審議とすることとなりました。

会員の皆さまには、上記の議案について郵送でお届けし、書面表決書を提出いただくようお願いいたしました。

総会開催日を提出締切日である八月五日(水)とし、期日までに返信がない場合は、「会長委任」とさせていただきますようお願いしております。

結果、無事にすべての議案について承認いただき、今年度も取り組みを進めております。

しかし、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の状況は、いまだ終息しているとはいえません。今後も状況を見つめながら、事業について精査していきたいと思っております。

毎年、本山からいただいております助成金について、コロナ禍の収束の見通しが立たない中、今年度の宗派財政は極めて厳しい状況になると予想され、宗派全体としてこれまでにない経費削減を進めざるを得ないことから、今年度の助成金について減額の要請を受けました。

今年度予算について、すでに会員の皆さまにご承認いただいた後でしたが、三役・常任委員での協議の結果、当初予算から2割減額した金額で助成いただくこととなりましたので、何卒ご理解賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

## お知らせ

遺産を守る活動に取り組み、地域のニーズを

満たして、未来の姿を描いていくことが願われた。

そして、地元のさまざまな組織が自分たちのルーツである真宗信仰や歴史や文化を大切にする一点で協力しあうことで合意し、一九九二(平成四)年に「崇仁地区の文化遺産を守る会」(以下「守る会」)を立ちあげたのである。これまで京都市文化財保護課の全面的な協力(事業の予算化)を得て、地道な活動が行われてきた。

「守る会」では、次のように会則を定め、歴史的に分裂や抗争を繰り返してきたことによる弊害を除き、イデオロギーを乗り越えて京都市に対する窓口を一本化する努力をした。

### 〈目的〉

崇仁地区の文化、歴史を掘り起こし、守り、育て、それを崇仁の住民、京都市民の前に明らかにし、新しい町づくりに寄与する事を目的にする。

### 〈組織〉

崇仁自治連合会、崇仁まちづくり懇談会(全解連)、七条部落史研究会(解放同盟)より役員をそれぞれ五名選出する。

会長には自治連合会の会長、事務局長には私・山内が就任し、事務局次長は崇仁まちづくり懇談会から選出され、具体的な事業が計画された。

まず「守る会」は、真宗寺院調査と柳原銀行本店の保存と運営(当時はまだ柳原銀行記念資料館と命名されてはいなかった)を同時進行で取り組むことになった。

同年十二月には「崇仁地区寺院調査団」を立ち上げて、おそらくは全国的にも例がない、被差別部落内の寺院調査が実施された。崇仁地区にはかつて八カ寺の寺院があったが、そのうち一カ寺は廃寺、三カ寺は移転している。

「寺院は、永い歴史のなかで、住民の精神生活を支え培い、生きがいを育んできた場所」であるため、「寺院活動を通じて、地区住民の

心の歴史を明らかにすること」(崇仁地区寺院調査団団長・柏原祐泉「ごあいさつ」『崇仁地区寺院調査中間報告書I』一九九四年)が、寺院調査の目的であった。調査は大きな成果を生み、一部であるが、被差別部落の人々による信仰の実相(水害や本願寺の火災における関わり)を明らかにすることができた。

一九九六(平成八)年六月、崇仁自治連合会、部落解放同盟京都府連合会七条支部、京都府部落解放運動連合会京都市協議会七条支部、これら三団体が正式に協定書を取り交わし、「崇仁まちづくり推進委員会」が発足した。さらに翌一九九七年十一月二十八日に、「柳原銀行記念資料館」が開館されている。

後編では、その経緯を述べ、さらに今後、京都市立芸術大学の移転を契機とする京都駅東部地区の新しいまちづくりを展望していきたい。

(後編につづく)

《2020年》	《2021年》
7月 6日 会計打ち合わせ	1月 第3回常任委員会
16日 2019年度会計監査	2月 第2回法要実行委員会
第1回三役会	3月 第1回『同関協だより』第62号編集会議
21日 第1回常任委員会	聞き取り調査
8月 5日 2020年度総会	4月 第2回『同関協だより』第62号編集会議
31日 『同関協だより』第60号発行	第3回法要実行委員会
9月 2日 第1回『同関協だより』第61号編集会議	2020年度現地研修会
8日 第1回常任・法要委員会	5月 第4回常任委員会
10月 5日 第2回常任・法要委員会	第3回『同関協だより』第62号編集会議
29日 第2回『同関協だより』第61号編集会議	6月 第2回常任・専門委員会
12月 8日 第3回常任・法要委員会	30日 『同関協だより』第62号発行
16日 第3回『同関協だより』第61号編集会議	☆各ブロック協議会(下半期)
31日 『同関協だより』第61号発行	
	※ 三役会を必要に応じて開催する。
☆各ブロック協議会(上半期)	※ 各ブロック協議会は年2回を目途に開催する。

2020年度 真宗大谷派同和関係寺院協議会 予算書	歳入の部	4,063,000 円
自 2020年7月1日 至 2021年6月30日	歳出の部	4,063,000 円

歳入

項 目	項 目	予算額	前年度予算額	比較増減	備 考	
1	1	会費	600,000	600,000	0	@5,000円 *120カ寺
2	1	本山助成金	2,300,000	2,300,000	0	
3	1	繰越金	1,162,922	636,964	525,958	前年度より繰越金
4	1	雑収入	78	3,036	△ 2,958	寄付・銀行利息 等
		合計	4,063,000	3,540,000	523,000	

＊ 本山助成金については、宗派からの要請を受け、予算書より2割減額になります(P5参照)

歳出

項 目	項 目	予算額	前年度予算額	比較増減	備 考
1	会議費	1,900,000	1,910,000	△ 10,000	
	1 総会費	100,000	720,000	△ 620,000	書面審議
	2 会議費	1,800,000	900,000	900,000	三役会、常任委員会、常任・専門委員会、法要実行委員会、会計監査
	3 法要実行委員会費	0	290,000	△ 290,000	廃目(会議費に統合)
2	事業費	1,250,000	1,100,000	150,000	
	1 組織拡充費	300,000	250,000	50,000	現地研修会
	2 会報費	950,000	850,000	100,000	『同関協だより』発行3回・編集会議6回
3	ブロック協議会費	400,000	190,000	210,000	
	1 助成費	300,000	90,000	210,000	@ 100,000円 *3ブロック
	2 聞き取り調査費	100,000	100,000	0	
4	事務局費	270,000	170,000	100,000	
	1 事務局運営費	70,000	50,000	20,000	
	2 発送費	200,000	120,000	80,000	
5	積立金会計回付金	150,000	150,000	0	
	1 積立金会計回付金	150,000	150,000	0	2017年度より積立
6	予備費	93,000	20,000	73,000	
	1 予備費	93,000	20,000	73,000	
	合計	4,063,000	3,540,000	523,000	

《2019年》	《2020年》
7月 8日 2018年度会計監査	1月30日 第4回常任・法要実行委員会
7月17日 第1回三役会	2月 4日 2019年度現地研修会 ～5日
18日 2019年度総会	2月25日 第1回『同関協だより』第60号編集会議
19日 第1回常任・専門委員会	4月 9日 第4回常任・法要実行委員会
第1回常任・法要実行委員会	【新型コロナウイルス感染症予防のため中止】
9月 4日 第2回三役会	15日 第2回『同関協だより』第60号編集会議
第1回『同関協だより』第59号編集会議	(リモート会議)
9月10日 第2回常任・法要実行委員会	5月20日 第3回『同関協だより』第60号編集会議
10月30日 第2回『同関協だより』第59号編集会議	(リモート会議)
11月26日 第3回三役会	6月 第2回常任・専門委員会
12月 9日 第3回常任・法要実行委員会	【新型コロナウイルス感染症予防のため中止】
第3回『同関協だより』第59号編集会議	
31日 『同関協だより』第59号発行	

2019年度 真宗大谷派同和関係寺院協議会 決算書	歳入の部	3,437,975 円
自 2019年7月1日 至 2020年6月30日	歳出の部	2,275,053 円
歳入	歳入歳出差引剰余金	1,162,922 円

項	目	項 目	予算額	収入額	比較増減	備 考
1	1	会費	600,000	501,000	△ 99,000	@5,000*99カ寺カ・講読料6,000
2	1	本山助成金	2,300,000	2,300,000	0	
3	1	繰越金	636,964	636,964	0	前年度より繰越金
4	1	雑収入	3,036	11	△ 3,025	銀行利息
		合計	3,540,000	3,437,975	△ 102,025	

歳出

項	目	項 目	予算額	支出額	比較増減	備 考
1		会議費	1,910,000	1,207,350	△ 702,650	
	1	総会費	720,000	654,850	△ 65,150	
	2	役員会費	900,000	277,500	△ 622,500	三役会3回、常任委員会4回、常任・専門委員会1回、会計監査1回
	3	法要実行委員会費	290,000	275,000	△ 15,000	実行委員会4回
2		事業費	1,100,000	747,042	△ 352,958	
	1	組織拡充費	250,000	253,212	3,212	現地研修会
	2	会報費	850,000	493,830	△ 356,170	『同関協だより』発行1回・編集会議6回
3		ブロック協議会費	190,000	90,000	△ 100,000	
	1	助成費	90,000	90,000	0	@30,000*3ブロック助成
	2	聞き取り調査費	100,000	0	△ 100,000	
4		事務局費	170,000	80,661	△ 89,339	
	1	事務局運営費	50,000	29,819	△ 20,181	
	2	発送費	120,000	50,842	△ 69,158	
5		積立金会計回付金	150,000	150,000	0	
	1	積立金会計回付金	150,000	150,000	0	
6		予備費	20,000	0	△ 20,000	
	1	予備費	20,000	0	△ 20,000	
		合計	3,540,000	2,275,053	△ 1,264,947	

積立金会計	2018年度繰越金	300,000 円	
	回付受金	150,000 円	
	合計	450,000 円	2019年度 残高

# 「是旃陀羅」と「旃陀羅」差別

講述 鶴見 晃 さん

前真宗大谷派教学研究所所員・同朋大学 准教授

## 第12話 -後編-

前号「第11話 -前編-」は「第12話 -前編-」の間違いでした。



単に「悪」だと言っているのではなく、さらに人間でない者と言ってきた。このことが、井元麟之さんが「旃陀羅」ということを問題にしてきた理由です。

「是旃陀羅」の問題というと、『仏説観無量寿経』の中で、「是旃陀羅」ということを、「穢多・非人」と結び付けてきた。これが、「間違いでした」、「申し訳ありませんでした」と、これで終わりだと思っている人がいるのです。

違うのですよ。「人間を、人間視しないあなた方の眼差しは一体何なのか?」ということを問うているのですね。

大乘仏教が起こってから、ずっと「旃陀羅」を人間でないと説いてきた。その誤りを認めなさい、撤回しなさいというのが、「旃陀羅」の問題なのです。

(本文より)

この講義は、二〇一九年二月十二日に東本願寺同朋会館で行われた、真宗大谷派教化伝道研修第一期修了生「遊戯之会」主催の真宗本廟奉仕団において、教学研究所所員(当時)の鶴見晃さんにお話いただいたものです。六十号掲載の前編に続き、後編です。

スッタニパータの「生れによって賤しい人となるのではない」という有名な言葉に続いて「わたくしは次にこの実例を示すが、これによってわが説示を知れ。チャンダーラ族の子で犬殺しのマータンガという人は、世に知られて令名の高い人であった。かれマータンガはまことに得がたい最上の名誉を得た。多くの王族やバラモンたちはかれのところに来て奉仕した」(中村元『ブッダのことば』、岩波文庫、三五頁)と出てきます。ここでは、四姓制度を批判しつつ、生まれによって尊い存在になるのではなく、社会の中でチャンダーラ族と呼ばれて蔑まれる存在であっても、精進して仏道を歩んでいくならば、徳の高い尊敬される者になるのだと説いています。このように初期の経典では、多くは四姓制度を批判する文脈でチャンダーラという言葉が出てきます。

大乘経典も、全ての存在を救うことが基本であり、平等を説いています。ですが、大乘経典の難しいところは、平等を説く一方で様々な差別もそこに含んで説かれていくことです。たとえば、部派でも修行の階位は五位など説かれていますが、大乘では菩薩道が複雑に説かれています。その最高位はもちろん仏

ですけれども、菩薩や聖者にさまざまな階位があり、凡夫の中にも内凡・外凡・底下の凡夫の違いが説かれています。そして、その凡夫に悪人も出てくる。そこでは社会的な善悪における悪人も出てきますので、それを仏・菩薩という仏道の階位とつなげると、大きな身分階層のようなものが大乘経典の中で描かれていることになります。分かりやすいのが、私たちの所依の経典である『仏説観無量寿経』(以下、『観経』)です。

『観経』の九品は、上品上生という大乘の菩薩から下品下生の悪人までを浄土に往生していく人間の姿として描いています。それは教相としては、浄土にみな往生していくのですから平等に救いがあるけれども、その往生の仕方には違いがあり、序列化がなされているわけですね。これは通常は下品よりは中品、中品よりは上品を求めるよう勧める教えと捉えられます。

ここは宗祖が『観経』を理解するにあたってポイントとなることです。ここは、ひとまずそのことは置いておき、大乘は基本的に平等を説くだけでも、しかしその説き方の中に、下品よりは上品が善であり、望ましい。逆に下品は悪であり、好ましくないということ教えるものを含んでいるわけです。そこに様々な問題を抱えているのです。その一つが「旃陀羅」問題であり、女性差別や障害者差別の問題もあります。

大乘経典になってから顕著になるのは、「旃陀羅」が「悪人」の象徴として説かれるようになることです。その一番有名な表現が『法華経』です。

安樂行品というところで菩薩が悪世で『法華経』を行ずる実

践方法を説かれるのですが、その中で「旃陀羅、及び猪、羊、鶏、狗を養い畋獵し漁捕する諸の悪律儀に親近せざれ。かくのごとき人等ある時に来たらば、則ちために法を説いて希望する所なかれ。」(『大正大蔵経』第九卷三七頁)と説かれています。「旃陀羅」という被差別民衆に加えて、動物を養ったり、狩猟をしたり、あるいは魚を捕ったりする存在が悪律儀、つまり戒律に背く者として表現され、「旃陀羅」はその殺生に関わる悪を犯す存在に先行して、「近づくなきでない者」として表現されています。大乘仏典では、この様な「旃陀羅」を「悪人」とする表現が色々なところに出てきます。その他、どのような表現が出てくるかというと、例えば、「菩薩旃陀羅」という言い方が出てきます。菩薩の道を踏み外した者を「菩薩旃陀羅」と表現しています。菩薩は仏道を歩んでいる者ですから、その出自がどうであれ、世俗社会におけるチャンダーラとは違うわけです。けれども、その菩薩に「旃陀羅」という言葉が付けられている。ここではすでに、「旃陀羅」という言葉が仏道において「外れた者・悪なる存在」として抽象化されているわけです。その様な形で仏典の中では、「悪人」を象徴する存在として用いられているのです。

初期仏教から大乘仏教にいたるまでに何故こういう変化が起こったのか。これはなかなか難しい問題です。大乘仏教の場合、様々な形で民衆に関わっていきます。その中で民衆に通じていく言葉を求めようとしていたということもあるでしょう。多くはないですが、「律」にも「旃陀羅」が「悪人」であり、

近づいてはならない者として説かれていることは、社会の「旃陀羅」差別と全く別に仏教の僧伽が存在することはできなかったということを表していると考えられます。世俗社会と僧伽は当然経済的にも密接に関わっていますので、社会を無視して僧伽は維持できません。そのようなところで社会の「旃陀羅」差別を受容していったのではないかと思います。

大乘經典の中にも、四姓の制度を明確に否定しているものもあります。有名なのは、論になりますけれども、『金剛針論』（馬鳴へ一〇二世紀）作と伝えられる。『大正大藏經』第三二卷論集部所収）は四姓を明確に否定してバラモン教を批判しています。あるいは、『摩登伽經』（『大正大藏經』第二一卷密教部四所収）という經典があります。

この經典には、阿難に恋をした女性の話が出てきます。この物語は色々な仏典に出てきますが、喉が渴いた阿難が、女性に「水をください」と言うが、その女性は「私は摩登伽（マータンガ）のもので、貴方の様なお方にお水を差し上げることはできません」と断るのですが、阿難は「その様なことは気にしない。だから、水をください」と言っ水をもらい飲んで、帰っていった。そうしたら、自分の様な者から水を飲んでいただいた素晴らしい方だと、身分を超えた向き合い方に感動して阿難に恋をするのです。

そして、阿難に会いたいと追いかけていくけれども、お釈迦様に止められ、「阿難と一緒に居たいなら、あなたも出家しなさい」と言っ、その女性は出家するのです。しかし、バラモ

を問題にしてきた理由です。

「是旃陀羅」の問題というと、『観經』の中で、「是旃陀羅」ということを、「穢多・非人」と結び付けてきた。これが、「間違いでした」、「申し訳ありませんでした」と、これで終わりだと思っている人がいるのです。違うのですよ。「人間を、人間視しないあなた方の眼差しは一体何なのか？」というのを問うているのですね。大乘仏教が起こってから、ずっと「旃陀羅」を人間でないと説いてきた。その誤りを認めなさい、撤回しなさいというのが、「旃陀羅」の問題なのです。

「旃陀羅」を「穢多・非人」と同じにしたこと。これは明らかな間違いです。職業など似ている点がありますが、状況は全く違います。そして、異なる者を同じだとするところには、二つの差別意識がはたらいっている。つまり、差別する側が、差別する対象に対して、異なる者を同じものとして両方を悪人視しているということです。そこに、どちらも差別すべき者だという、差別の視線が「旃陀羅」と「穢多・非人」の両方に当てられていくことになります。差別の視線がどちらか一つであれば、同じものにはならないですね。日本において、「穢多・非人」を「旃陀羅」として差別したというのは、「穢多・非人」を差別する様に「旃陀羅」を差別してきた、こういう意味をもっているのです。だから、「『観經』を読まれるとたまらぬのや」という痛みの声があるわけです。

「旃陀羅」問題というのは、仏教において、全ての存在が平等だと言いながら、一部の存在を悪なる者とし、人間でない者

ンたちは、なぜ下賤の者を出家させるのかと非難をするのです。そこで、お釈迦様は「その様な身分は関係ないのだ」と女性の前世を語って教え諭すということが説かれている。こういう經典です。

解放運動からの問題提起として、一貫してこの仏教の「旃陀羅」差別の問題を取り上げてこられたのが、九州の井元麟之という方で、差別事件を通して「旃陀羅」の問題を知り、「旃陀羅」の語を削除する様、何度も東西本願寺へ申し出をされ、求めてこられました。

井元さんが問題にしているのは、「旃陀羅」を悪人としていうところ。仏教が、特定の存在を悪人視し、「旃陀羅」を人間でない者と説いてきたことです。善導の「旃陀羅解」にも、「人の皮を著たりといえども、行、禽獸に同じ」という言葉が出てきます。つまり、人間の格好をしているが、人間でないと断っています。

単に「悪」だと言っているのではなく、さらに人間でない者と言ってきた。このことが、井元さんが「旃陀羅」ということ

として差別してきたと、こういう問題です。

そして、「是旃陀羅」問題というのは、我々僧侶・教学者が、その事を全く問題とせず、「旃陀羅」と「穢多・非人」を同じものとして差別してきた。それを説き、再生産してきた。尚且つそこには、『観經』という經典、仏教という道理を背景とした、宗教的な正当性をもって差別を説いてきたということがあるのです。

『観經』の中で、悪人として差別されている存在が説かれています。我々は、それをどう理解してきたのか。ここを私たちは考える必要があるのです。ですから、非常に根本的な問題です。これは真宗の中で一部の問題ではなく、仏教二五〇〇年の歴史を問い返す大きな問題であり、仏教の本質に関わる問題です。

しかも、『観經』です。善導大師が「浄土の要門」と表現しています。必ずここを通らなければならない門です。私たちが、この問題を通して、何を教えられなければならないのか。それは差別という、人間の根本的なあり方に根ざす問題を通して、凡夫であることを徹底して教えられるということだと考えます。そのことが教えられない、私たちに問題とならないとするならば、私たちは本当に浄土の門をくぐったのかと問わなければならない、ということが言えるのではないかと思います。

